

## 楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに! — 第四回 (2000年度) 春期ドイツ語インテンシブコース報告 —

大塚 讓 編  
ダーニエル・アルノルト  
フェリツィタス・ドーブラ  
ゲーザ・オルデハーフェル

目次 (カッコ内は執筆者)

0. はじめに
1. 概況 (大塚 讓)
2. コミュニケーションの戦略／不躱な質問／音声練習／不安について (大塚 讓)
3. ドイツの都市AからZまで／度量単位 (なぞなぞ)／道順の説明 (都市ゲーム)  
(ダーニエル・アルノルト)
4. ハンブルク訪問／シングルか大家族か／未来における労働と生活／ゴミはどこへ?  
(ゲーザ・オルデハーフェル)
5. これ誰のもの?／あやうくわすれるところだった／故郷—それはあなたにとって何?／ドイツ人のお気に入りの玩具—犬の周辺  
(フェリツィタス・ドーブラ)
6. 研修授業 [榊山 元+ミリアム・ツァイリンガー]

### 0. はじめに

私たちは、今年度も、意欲ある学生が存分にアクティブに学習できる場を提供したいと願い、「第四回春期ドイツ語インテンシブコース」を開催した。以下はその報告である。尚、ダーニエル・アルノルト、フェリツィタス・ドーブラ、ゲーザ・オルデハーフェル各氏の報告は、ドイツ語で執筆されたものを大塚が訳出したものである。

※ 参考までに末尾に今年度のプログラムが掲載されている。

### 1. 概況

大塚 讓

第四回インテンシブコースは、2000年3月27日(月)から3月30日(木)までの4日間にわたって実施された。時間配分は各クラス毎日2時間(240分)とし、午前1時間(120分)、昼食後1時間(120分)とした。4日間で960分となり、これを通常クラスの授業時間数に換算すると90分授業を週3回行うクラスの約3.5週間分、90分授業を週2回行うクラスの約5.3週間分に相当する。

今回は参加者の要望に応え、段階Ⅲを加えて全3段階とした。レベルは段階Ⅰが1年終了程度、段階Ⅱが2年終了程度、段階Ⅲが3年終了程度を想定した。

3段階に分けたことで2つの問題が生じた。第一に札幌サテライトには2つの教室しかないため、3段階のクラスが同時並行で授業を行うことはできず、かといって5時以降に授業を行うわけにも行かないので、段階Ⅱと段階Ⅲの合併授業を部分的に設定せざるをえなかった。しかし、この合併授業は、段階Ⅱにとっては、少しレベルの高いことに挑戦してみることであり、段階Ⅲ

にとっては逆に余裕を持って既習事項を復習することであり、結果的にそれぞれ積極的な意味を持ち得たように見受けられる。

今回も共通テーマを立てなかった。その方が各講師が担当クラスのレベルや関心に配慮しつつ、より自由に現代のドイツ語圏の様々な側面を紹介できると考えたからである。なお教案は事前に大塚に提出され授業内容が重複しないよう調整された。

参加者数は段階Ⅰが13名、段階Ⅱが5名、段階Ⅲが4名、合計22名であった。

プログラムの内容面では、例年通り、最初の時間に段階Ⅰから段階Ⅲまでが参加して「出会いのゲーム」を行った。参加者全員が早く打ち解けることを願ったことである。アルノルトと大塚が企画・実施にあった。

今回は二人の若いドイツ語教師志望者にもティームティーチングの形で研修授業を行う機会を提供した。一人は本学の卒業生榊山 元君で、彼は交換留学生としてバイロイト大学で1年間勉学の経験を持ち、本学卒業後はウィーン経済大学の正規学生として勉学を続けた。今一人は北大へ交換留学しているミュンヘン大学学生 Miriam Zeilinger さんで、彼女の専攻は日本学と DaF (外国語としてのドイツ語) であり、ドイツではすでに外国人に対するドイツ語教師としての教育実習を行っているが、日本でもぜひとも実習を行いたいという強い希望を持っていた。工夫に満ちた二人の授業は受講者からも高い評価を得、コース全体に活気と魅力を付け加えてくれた。なお二人の授業の教案は事前に大塚に提出・説明され、また授業そのものにも大塚が立ち会うことで研修の実を挙げる努力がなされた。ここに彼らの教案の骨子を再録しその授業の一端を記録に留める次第である。

## 2. 大塚 譲

### <Stufe 1>

テーマ：ドイツ語圏の人々とコミュニケーションを交わす際に必要な基本的戦略を学ぶ。

目 標：できるだけ多くの基本的場面を演じ表現を身に付ける。

教 材：(1) Videothek Deutsch, Szenen im Alltag (hueber Verlag), (2) 「コレクション・ドイツ語③話す」(中山 純 著, 1997年白水社)

実 施：

モデル(ビデオの場面)にならって類題をペアで演じて行く、というのがこの授業の基本方法である。次のような順序で諸課題を演じて行った。

1) 出会いと別れ：一般的なコミュニケーションの始め方と終わり方を実際にペア毎に演じてみた。最初の挨拶とお別れの仕方を、親しさの度合いによる違いを考慮しながら演じる。相手との距離の取り方、握手と抱擁の違い、アイコンタクトのあり方などにも注意が払われた。

2) いくつかの重要場面：駅・インフォメーション・招待

同様の手順で、駅での列車についての問い合わせ、乗車券や特急券の購入と座席を指定する場面を学び、条件を変えたいいくつかの類題にペアワークとして取り組む。またインフォメーションでホテルを予約しそこまでの道順を聞く場面、タクシーで目的地まで行く場面も同様に取扱った。同様に小さなパーティーに招待され、行くことを約束する場面と先約があって断る場面、次に実際にパーティーに臨んで人に紹介されて言葉を交わし、最後にホストに丁寧に礼を述べて別れを告げるまでの場面を演じてみた。インフォーマルなパーティーとややフォーマルなパーティーとの違いなども踏まえ、またペアの組み合わせを何度も変えた。

(ここでの課題は、ドイツ語コミュニケーションのイロハに属することなので、昨年に引き続き本年度も取り上げた。本年度は Stufe I の授業のみを行った。)

### 〈Stufe 2〉

テーマ：遊んでしゃべって復習しよう！

目標：自分の価値観や好みを直接問われる自己表現の練習

教材：44 Sprachspiele (hueber Verlag)のなかの第1ゲーム「不躰な質問」(S.6-7)

ルール：質問の書かれた24枚のカードを重ねて真ん中に置き順番に開いて行くが、どんな質問に対しても正直に答えなければならない。質問はいずれも価値観や好みに深くかかわるものばかり。勝敗はなく、山札が無くなったら使用済みのカードを切って山札とする。同じ質問を再び引いた場合には、任意の誰かに質問することができる。

経過：まず全員で全24個の質問を読み理解した。ルールは簡単だが、質問が人の価値観や好みに直接関わるものばかりなので、なかなか内容豊かで緊張感のあるゲームとなった。

もちろん2年目を終えたばかりの学生であるから、語彙に関して教師が随時助け船を出すのは当然のことである。質問についてやや立ち入ると、無邪気な面白さで盛り上がる質問もある。例えば「何を特に好んで食べますか?」「宝くじで多額のお金を手に入れました。そのお金で何をしますか?」「どんな動物になりたいですか?」「どこに住みたいです?」などである。これらは語彙が分かれば答えられる単純な問いである。第一問はたまたまドイツ人のゲストが引き当て、和食で好きなもの、嫌いなもの、特に恋しいドイツの食べ物などの話で盛り上がった。ここでのように十分時間がある場合には質問に関連して自由に問答が展開するのも一興である。しかし次のような質問になると、簡単にも答えられるが一定の熟慮を要する面もある。「あなたの国でドイツと違うのはどういう点ですか?」「あなたの親友はどんな風な人ですか?」「どんな人があなたの人生に影響を与えましたか?」次のような質問になると信条告白に近いものを求められるので、どのように答えるにせよ答えが表白されるまでの思考回路は、外国語まで関わってくるので単純なものでは済まない。「いつあなたは幸福でしたか?」「どんな人間にあなたはぞっとしますか?」「どんな特性が人間にとって重要であると思いますか?」「一番腹が立つのはどういうことに対してですか?」「どんなことが一番うれしいですか?」「どんなことを思い出すのが好きですか?」「誰と一緒にいたいですか?」長考する者も現れるし周囲の者が理解するまでに何度も言い直さなければならない場合も出てくる。しかし参加者を最も苦しめたのは次の二つの質問である。「自分のどんな点を改めたいですか?」「どんな状況であなたはウソをつきましたか?」後者の質問を引き当てたドイツ人ゲストは、顔面を紅潮させて考え込み話すまでにかなりの時間を要したほどである。

このゲームには極めて単純ながら学習者を緊迫した自己表現の試みに拉致せずにはおかない不思議な力がある。2年終了者たちは何とか自分を伝えようとして必死で自分の語彙を攪拌する重要な経験をしたように思われる。

※ 第4ゲーム「それは何だろう?」により受動態と再帰動詞の練習をするつもりだったが、時間の都合で割愛した。

### 〈Stufe I / II〉

教材：Stufen International I・II・IIIの巻末の発音解説教材

目 標：音声練習

経過：Stufen International (Klett Verlag) には、ドイツ語の本格教材の中でも、大変発音習得に配慮した教科書である。各課に Phonetik の項が設けられており、また全 3 巻の各巻末に発音上の重要ポイントに絞った練習問題が設けられている。今回は、この練習問題を取り上げ、120 分の授業の中で駆け足で全要点を学んだ。ここで求められる学習方法は実に徹底したものである。発音しにくく聞き取りにくい母音や子音を個別に取り上げて、いちいち、テープでの聞き取り練習と発音練習を交互に行い徹底習得を図る。取り上げられた「音」は以下の通り。1) Ö-Laute 2) Ü-Laute 3) E-Laute 4) R-Laute 5) ich-Laut と ach-Laut 6) 二重母音 [ai] [au] [ y ] 7) Haus-aus の類の聞き分け 8) 子音の区別 [s] [ts] a) [z] と [tz] の区別 b) [v] と [b] の区別 c) [v] と [f] の区別 d) [r] と [l] の区別 e) [b] と [p] の区別 f) [s] と [z] の区別

2, 3 年ともなると、発音上の我流の癖が付き始めそれが原因となって聞き取りの力が伸び悩むといったケースも少なくない。その意味では系統立てた発音矯正訓練と聞き取り練習ができたことは幸いであった。

〈Stufe III〉

教 材：Stufen International III Lektion 28 (S.122-131)

目 標：不安について考える／語学的課題＝冠飾句の理解／速読の練習

私たち現代人は様々な不安に取り囲まれて生きている。ここではこの問題をめぐるドイツと日本の状況を比較する。まずドイツの統計を読み解きながら、ドイツ人たちが失業問題、生活維持費の上昇、重病、高齢になって社会福祉に依存するようになること等々に最も大きな不安を抱いていることを知る。これらを始めとする 12 の項目について参加者も自分がそれぞれ何に一番大きな不安を持っているかについて自己表現を試みた。

洋の東西を問わず若者たちの不安の最大の原因の一つは試験である。試験一般に対する心得と筆記試験と口頭試験に対する不安の克服法を読み、参加者の対策法と比較した。

最後に不安の克服法を説く長文のテキストを読む。20 個の空欄に相応しい分離動詞を記入しながら、また提案された 6 つ要点（自然な不安、不安妄想、不安状況への反応、不安の成立、意識化による不安の克服、不安克服の訓練法）に即して 6 つの段落に分けながら精読する。

テキストの中に現れた冠飾句は十分理解されたが、それに続く冠飾句の集中練習は時間の関係で扱えなかった。

### 3. ダーニエル・アルノルト

〈Stufe I〉

テーマ：ドイツの都市 A から Z まで

素 材：ジグソーパズル、パンフレット、冊子、小樽の絵はがき

目 標：パンフレットと冊子を手がかりにドイツの都市への興味を喚起する。

授 業：

学生たちはドイツの全州からなるジグソーパズルを渡され、諸部分を組み合わせた後、自分たちが知っているドイツの諸都市の名前をその中に記入しなければならなかった。一定の表現パターンを使って学生たちは個々の都市の位置（方位や地域的特徴など）を叙述した。それから学

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

生たちはグループを構成し持参されたパンフレット（Aachen〈アーヘン〉のAから Zwickau〈ツヴィッカウ〉のZまでの）から任意の一都市を選んでグループワークでその都市に関するいくつかの質問（位置、大きさ、特徴など）に答えなければならなかった。次にこれらの諸都市は全体授業で紹介された。金曜日のこのクラスの第2講目では、まず公式の書簡の形式や非公式の書簡の形式、宛名書きなどの理論的な事柄が説明され、学生たちはそれに基づいて自分が選んだドイツの都市に宛てて小樽発の絵はがきを書くことが出来た。絵はがきを「書く」ことは当初考えていたより多くの時間を要したので、残念ながら絵はがきのテキストを全体授業で紹介する時間は残らなかった。

学生たちはとても動機が高く、大きな熱意をもって「自分たちの」ドイツの都市の観光案内所に自分たちの活動について説明した。残念ながら一枚の絵はがきもドイツ側からの返事をもって報いられることはなかったが……

### 〈Stufe II〉

テーマ：度量単位（なぞなぞ）

素材：1円硬貨の入った缶、リボン1本、KLM オランダ航空の本物の時刻表、新聞など

目標：長さ、重さ、距離、年などの正確な記述

授業：学生たちは、一定の表現パターンを用いて、数（缶の中の硬貨）、年（新聞）、長さ（リボン）、時間（飛行時間）など様々な対象や事実を見積もらなければならなかった。その際度量単位や小数位の読み方にも留意された。ドイツ語の略語についても説明された。

### 〈Stufe III〉

テーマ：道順の説明（都市ゲーム）

素材：ワークシート「市街地図」（出典：アンネ・シュピアー「ゲームで学ぶドイツ語」コルネルゼン社）

目標：道順の説明に関してすでに持っている知識を強化する

授業：学生たちは6つの買い物（歯ブラシ、新聞、牛乳、切手、お金、ガソリン）を6つの店（ドラッグストア、新聞スタンド、スーパーマーケット、郵便局、銀行、ガソリンスタンド）でしなければならなかった。そのため与えられた市街地図の上で最短の道が見つけられなければならなかった。該当する道は表現パターンに記載された言い回しを用いて正確に叙述されなければならなかった。

## 4. ゲーザ・オルデハーフェル

### 〈Stufe I〉

テーマ：ハンブルク訪問

目標：知らない町で道を尋ねるための言い方の習得あるいは復習

小テーマ：

1. ホテル探し
2. 町の見物
3. 催しについての問い合わせ（内容、時間、日程）

授業プロセス

第一段階：ゲーム「ハンブルク市旅行案内所にて」

最初に上記3つの小テーマ（ホテル探し、町の見物、催し物）に関する情報を手に入れることが出来る質問を全員で収集した。その後参加者は諸情報、ホテルリスト、市街地図、催し物カレンダーをハンブルク市旅行案内所で調達した。

第二段階：小グループでのホテル予約ゲーム

ホテルの予約の際に役に立つ質問を収集する。ホテル従業員と旅行者とにグループ分けした後、各参加者がホテルの部屋を（ゲームシートを用いて）予約をした。

第三段階：市街地図を用いてホテルへの道順を叙述する。

※ 段階の間のくつろぎメニュー：低地ドイツ語の歌

## <Stufe II>

テーマ：シングルか大家族か

目標：意見を表明し、希望を表現し、表現力を拡大する。

小テーマ

1. ドイツにおけるシングル生活
2. パートナー探し

授業プロセス

第一段階

テーマへの導入：「シングルとは何か?」「日本にシングルはいるか?」「何が長所か? 何が欠点か?」「シングルと大家族以外にどのような生活形態が存在するか?」「君はシングルとして生活したい?」「人はシングルとして生活したくなくればどうするのか?」等々

第二段階

“Spiegel” からの “ドイツにおけるシングル” に関する記事とグラフ

第三段階

ゲーム「パートナー探し」（ゲームシート使用）

※ 段階の間のくつろぎメニュー：Die Prinzen の “Wer ist der Typ?”

## <Stufe III>

テーマ：未来における労働と生活

目標：表現能力を改善する、将来にかかわる意図、希望を表明する、文法：接続法

小テーマ：

1. 君は何になりたいの?
2. 未来の家庭はどんな様子か?
3. 未来の職場はどんな様子か?

授業プロセス

第一段階：参加者がお互いに質問しあうー君は何になりたいの? 君は外国の大学で学んだり海外で働いたりしたい? 君はいつ引退したいか?

第二段階：“Spielgel” の図表「ドイツの家庭」をもとにしたディスカッション

※ 段階の間でのくつろぎメニュー：ゲーム「正しい文とアクション」および Die Prinzen の歌「僕の自転車」

### <Stufe II+III>

目 標：表現力「批判」「賛成・同意」「拒絶」「提案」

文 法：wenn 文, weil 文 前置詞

小テーマ

1. ゴミはどこへ？
2. 環境にやさしく生きる

授業プロセス

第一段階：絵を結びつける（ゴミと正しい処理、何をどこにへやるか？）。

ドイツのリサイクルについてのテキストを読む。

第二段階：テーマ「環境にやさしく生活する」に関する提案を収集し、それに引き続いてディスカッションする。

※ 段階の間のくつろぎメニュー：Die Prinzen の “Politiker”（政治家）。前置詞を用いたドミノゲーム「アントンはどこ？」。

### 結論

学習者たちは大変積極的かつ主体的に参加した。特にゲーム（「ドミノ」、「正しい文とオークション」）あるいはゲーム的な授業の部分（市のインフォメーション、ホテル探し）では学習者たちは夢中になって参加した。全体授業での作業はこれらのクラスでは良く機能したが、表現意欲の劣る学習者の場合には、むしろ2グループに分かれて作業しなければならないだろう。

## 5. フェリツィタス・ドープラ

### <Stufe I>

このクラスのために私はミュンヘン市の遺失物取扱事務所の写真を出発点の資料として使用した（出典：南ドイツ新聞のマガジン）。

言葉のトレーニングのためには、私はヴァルター・ローフェルト著「初級用練習教材」（フェアラーク・フュア・ドイチュ社刊）の 42.1\* と 43.1\*\* を付属カセットとともに使用した。

\*テーマは “Wem gehört das?” [これ誰の物?]

\*\*テーマは “Das hätte ich fast vergessen” [あやうく忘れるところだった。]

学生たちにたくさんの語彙を何とか使用可能なものとして仲介するために、リストが作成されたが、その狙いは：

- a) 語義を認識すること、及び語彙を写真教材に現れた現物の写真に結びつけること
- b) それらの現物を学生の 카테고리・グループに振り分けること（どのグループも大きな集成資料の中からただ5つの対象を選ぶよう求められた。）
- c) 出来事と行動を結びつけること。このために学生たちは自分のグループによって選ばれた5つの対象を持参することができる。

私は写真リストに基づいて写真カードを作ったが、それらは二つの学生グループによって任意に引かれる。それぞれのグループがいまやカードを持っている。（Aグループは遺失物取扱事務所の係官、Bグループは客。）

ローフェルトから取ってきた様々の対話のタイプに従って、AかBどちらかのグループが質問をし、他方がカードを一瞥後、当該の対象が自分に属するか否かを答えなければならない。こう

して語彙練習は最後にはコミュニケーション練習と化し、この練習が学生たちに、習得した語彙の応用練習をすることを可能にした。このためにオリジナルの写真資料が使用されたことが、このシミュレーション的なコミュニケーション状況に少々本物的な性格を与えたが、これが学生たちには愉快であった。彼らは少々分厚いのリストと共に、この授業で作られた小さな辞書を持ち帰ることができた。

#### 〈Stufe II〉

テーマ＝故郷—それはあなたにとって何か？

教材として使われたのは、Sichtwechsel 1, Themen neu 3, 写真のコピー, ビデオカセットとオーディオカセットであった。導入として私たちは Helmut Heissenbüttel の詩“*Heimweh*” (『郷愁』)を読んだ。その後、学生たちは、まず彼ら自身の知識についてキーワード「郷愁, ホームシック」を連想するよう求められた。その際彼らは「今日」「以前」「明日」という3つの時間レベルについて内省しなければならなかった。彼らは、お気に入りの町や村, 絵, 人間たち, 食物, 芸術, 音楽について, また自分の最も初期の記憶と不安, 安心と温かさについて熟慮するよう求められた。最後に「今日」「明日」「明後日」という時間カテゴリーの中で第二の故郷を選ぶよう求められた。Sichtwechsel の聴解テキストとして私たちはあるチュニジア人の報告を聞いた。学生たちはワークシートの陳述が正しいか間違っているか決めるよう求められた。

とりわけ内省の課題は学生たちを喜ばせたが、それは彼らが自分自身の知識に基づいてドイツ語で自己表現ができ、将来の外国滞在に備えて自分自身の故郷についての情報や自分の考えや感情を外国語で収集することができたからである。

#### 〈Stufe III〉

テーマ：ドイツ人のお気に入りの玩具—犬の周辺

教材：Sichtwechsel 1, オーディオカセット, プリント, ビデオ

このテーマを私が選んだ意図は、日本とドイツで普通に行われる犬やその他のペットに対する人間行動について学生たちと話し合うことにあった。ひとりの犬を飼っている女性へのインタビューが聞き取りテキストとして使われた。

写真が会話に弾みをつけるべく使われた。写真と一連のビデオは、確かに学生たちによって短い好意的なコメントによって歓迎されたし、彼らはまたいくつかの意見をドイツ語で述べはしたが、しかし本当の議論には発展しなかった。ひょっとしたらこのテーマは学生にとってそれほど意味のあるものではなかったのかもしれない。

### 6. 榊山 元／ミリアム・ツァイリンガー

#### 〈Stufe I〉

テーマ：ドイツの学生生活

教材：プリント配布 (オリジナル教材)

文法テーマ：過去分詞

#### 内容

授業の導入として簡単な自己紹介を行った後、読解に取り組んだ。テーマは「ドイツの学生生

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

活」。ドイツ人学生の日記を想定した文章をこちらが用意し、全員で精読した。これに関連して語彙・文法の解説を行った。文法に関しては練習問題も用意し、各自の復習がスムーズにいくよう配慮したつもりである。

最後に全体を3つのグループに分け、作文の練習も行った。具体的には、名詞や動詞が一語書かれたカードを各グループに10枚程度配り、与えられた語彙で自由に文章を作るというものである。学生側にしてみれば多少難しかったかも知れないが、それでもユニークな作文がいくつも見られ、それなりに楽しんで取り組んでくれたようだ。

#### 配慮事項

まずはチームティーチングの良さを活かそうというのが第一目標であった。文法的な解説は日本人が行い、会話面ではネイティブが中心になって行うことで、それぞれの長所を發揮することができる考えた。また、授業中に私達の間で意見の食い違いが起きないように、事前の打ち合わせは入念に行った。私達の連携不足は、特に初級者にとって即、頭の混乱や不信感へとつながってしまうからだ。

#### <Stufe II>

テーマ：環境問題

教材：プリント配布（オリジナル教材）

文法テーマ：冠飾句、受動態など

#### 内容

読解と文法解説が7割、ドイツの環境問題についての解説が2割、残り1割がディスカッションである。読解と文法については、互いをリンクさせながら同時進行で解説を進めていった。このテキストそのものが環境問題を扱ったものなので、内容解説を同時に行うことで、ドイツの環境への取り組みを多少なりとも紹介できたと思う。具体的には、バイロイト市やミュンヘン市のゴミの回収方法を紹介し、札幌市の場合と比較した。

最後にディスカッションも試みたが、まだまだ自由に意見を出し合うのは難しかったようで、沈黙が続く場面もあった。これに関してはこちらの配慮不足もあったので反省材料としたい。

#### 配慮事項

教材を全て自分たちで作成したのは、教える側の良さを引き出すには、教える本人が教材を作成するのがベストだと考えたからである。今回特に気をつけたのは、「読解」と「文法」の垣根を極力取り払うことだった。読解教材と文法教材をできるだけ一本化することで、「読むための文法」を少しは印象づけられたかと思う。

またドイツ語の場合、ある程度文法学習を終えた人でも「語彙は分かっているのに読めない」と言うことがある。それは、文章を読むための方法論や思考回路が身に付いていないからというケースが多い。これを身につけるには、「正しく読めた人の思考回路を真似してゆく」のが効果的だ。それを実践するため、読解教材を解説する際、「どうして自分にはこの文章が読めたのか」を私自身がじっくり分析し、それをできるだけ分かりやすく伝えるように心がけた。

2000年春期ドイツ語インテンシブコースプログラム

		1 講目 (9時30分~11時30分)		2 講目 (13時~15時)	3 講目 (15時30分~17時30分)	
3月27日 Mo	6階	Stufe I-II-III Otsuka Arnold Zeilinger Sakakiyama Kennenlernen-Spiel 出会いのゲーム	6階	Stufe I Otsuka コミュニケーションの基本(1) 一始め方と終わり方	Stufe I Arnold Deutsche Städte von A-Z (1) ドイツ都市巡り(1)	
			8階	Stufe II Arnold Ratespiel 当ててごらん	Stufe II・III Zeilinger+Sakakiyama Umweltsprobleme 環境問題	Stufe III Otsuka Angst/Furcht und ihre Überwindung 不安/恐怖とその克服
3月28日 Di	6階	Stufe I Dobra Wem gehört das? これ誰のもの?		Stufe I Oldehaver Besuch in Hamburg ハンブルク訪問		
	8階	Stufe II Otsuka Spielen, Sprechen und Wiederholen! 遊んでしゃべって復習しよう!		Stufe II・III Dobra Heimat - Was ist das? 故郷とは何か?	Stufe III Oldehaver Die Umwelt oder wir? 環境それとも私たち?	
3月29日 Mi	6階	Stufe I Zeilinger+Sakakiyama Unterhaltungen in Deutschland ドイツの娯楽		Stufe I Dobra Das hätte ich fast vergessen. あやうく忘れるところだった		
	8階	Stufe II Oldehaver Single oder Großfamilie? シングルそれとも大家族?		Stufe II・III Oldehaver Arbeit und Leben in Zukunft 未来の仕事と生活	Stufe III Dobra Das Zweitliebste Spielzeug: rund um den Hund 2番目に好まれる玩具・犬を囲んで	
3月30日 Do	6階	Stufe I Otsuka コミュニケーションの基本(2) 一駅・車中・レストラン・パーティー		Stufe I Arnold Deutsche Städte von A-Z (II) ドイツ都市巡り (II)		
	8階	Stufe I Zeilinger+Sakakiyama Deutschland und Japan aus fremdem Blick 外から見たドイツと日本		Stufe II・III Otsuka Phonetische Übungen 音声練習	Stufe III Arnold Wie komme ich zum OO? (Wegbeschreibung) OOへはどう行けばいいのですか? (道順の説明)	